



老年期の孤独感と生活意識に関する研究

則定, 百合子
齊藤, 誠一

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 3(1):101-106

(Issue Date)

2009-09-30

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81001690>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001690>



老年期の孤独感と生活意識に関する研究

The Study of Loneliness and Life Consciousness in Old age

則定 百合子* 齊藤 誠一**
Yuriko NORISADA* Seiichi SAITO**

要約：本研究は、老年期の生活感情の中で孤独感に焦点を当て、個人的特性、社会的ネットワーク、他者との比較・過去との比較と孤独感との関連を検討することを第1の目的とした。また、老年期の人々が、過去あるいは現在の自分をどう意味づけているか、質的な分析を行うことを第2の目的とした。高齢者35名を対象とした半構造化面接の結果、①好奇心・社会的スキルが無い者は、孤独感H群がL群よりも高い、②自己開示傾向が高い者は、孤独感L群がH群よりも高い、③信仰が無い者は孤独感H群がL群よりも高い、④余暇を自宅で活動する者は孤独感H群がL群よりも高く、外で活動する者は孤独感L群がH群よりも高い、⑤無職者では孤独感L群がH群よりも高く、有職者では孤独感H群がL群よりも高い、⑥過去肯定者では孤独感H群がL群よりも高く、現在肯定者では孤独感L群がH群よりも高い、ことが明らかとなった。次に、過去・現在への意味づけでは、中年期過去肯定は「未来への希望」「現在の孤独」「充実感」、現在肯定は「責務からの解放」「生活のゆとり」に分類された。最も良かったと思う時期において、過去肯定は「育児からの解放」「社会的役割の充実」「経済的ゆとり」「自由」「その他」、現在肯定は「育児からの解放」「社会的役割からの解放」「家族からの追慕」「その他」に分類された。

I. 問題と目的

老年期は人生周期における最終段階である。Erikson (1950) は、誕生から死に至るまでの人生周期を漸成的に論じ、この老年期の心理・社会的課題として、「自我の統合」を挙げている。自我の統合とは、自分の唯一の人生を、そうあらねばならなかったものとして受容し、また、自分とは異なる生き方や態度をも尊重することである。

中年期から老年期へと移行する段階において、人はさまざまな変化を経験することになる。例えば、定年退職により、それまでの日常生活は一変し、それまでの人間関係の中で重要な位置を占めていた職場での関係性は確実に失われる。また、加齢の進行に伴い、同年代の仲間、配偶者、近親者との死別、子どもの独立などの別れに遭遇することにより、コンボイを構成する成員の数や種類も減少する。これらのことにより、この時期はそれまでに個人が培ってきた4つの重要なもの、すなわち、心身の健康、経済的基盤、社会的ネットワーク、生きがいを失うことから、「喪失の時代」とも呼ばれている(諸井, 1995)。

近年、我が国では核家族の増加に加え、高齢化が急速に進んだことにより、マスメディアでも老人の孤独死が頻繁に取り上げられるようになってきた。これにより、高齢者の孤独感に関して、さまざま

な角度から関心が寄せられてきている。こうした中、「高齢者⇒独り暮らし⇒孤立⇒孤独」といった図式にみられるように、高齢になると独り暮らしになる可能性が高く、社会的に孤立しやすくなった結果、孤独感が高まるだろうという一般的認識が我が国でも根深く存在する(長田・工藤・長田, 1989)。しかしながら、Peplau & Perlman (1982)の研究では、こうした三段論法が支持されないことが実証され、老年期には孤独感が高まるという仮説は棄却されている。

また、従来、老年期は衰退あるいは死と結びつけて捉えられることが多く、そのために高齢者の幸福感は低下し、その生活感情は否定的なものとして考えられる傾向にあった。しかしながら、これまでに行われてきた実証研究の多くから、老年期の否定的な生活感情に関する一般的見解が不当なものであることが示され、こうした生活感情を左右するのは人格特性や経済状況、夫婦関係などの社会文脈的要因であることが明らかにされてきた。例えば岡本(1995)は、高齢者の精神的充足形成に関連する要因として、①高齢者を取り巻く物理的・環境的状况に関する要因、②自分の現状に対する高齢者自身の主観的評価に関する要因、③高齢期以前の要因、④人格的要因、の4つの側面が存在することを示唆している。

このように、喪失や孤独という否定的な面が強調されてきた老年

* 神戸大学大学院総合人間科学研究科修士(現所属：武庫川女子大学発達支援学術研究センター)

** 神戸大学大学院人間環境学研究科准教授

(2009年4月1日 受付)
(2009年9月1日 受理)

期において、すべての人がこれらの危機を一樣に経験するわけではない。また、これらの危機に直面した際の対処の仕方も、個々の生活環境および個人的経験の歴史や人格特性などに大きく影響されると考えられる。こうしたことから、孤独死が注目される一方で、平均寿命が延びて身体的にも精神的にも健康な高齢者が増加したとも指摘される現代社会の中で、老年期の心理を検討することは有意義だといえる。

本研究では、まず、老年期の生活感情の中でも孤独感に焦点を当て、その在り様と関連する要因を検討することを第1の目的とする。具体的には、孤独感と関連する要因として、長田ら(1989)の研究で示唆された、社会的ネットワークや、高齢者のアニバーサリー・スライドに象徴されるような、他者との比較あるいは過去との比較を取り上げ、孤独感との関連について検討していくこととする。さらに、自我の統合を発達課題とする老年期の人々が、過去あるいは現在の自分をどう意味づけているかに関して、質的な分析を行うことを第2の目的とする。

II. 方法

1. 調査対象

兵庫県内の65歳以上の高齢者35名(大正9年～昭和12年生まれ、平均年齢71.66歳、SD=4.39、MIN=65、MAX=82)。対象者の基本属性および居住地域をTable1に示した。

Table1 調査対象者の基本属性

年齢	65-69	70-74	75-79	80-84	
人数	N=15	N=11	N=8	N=1	
性別	男性	9	4	4	1
	女性	6	7	4	0
居住地域	都市部	8	6	5	1
	農村部	7	5	3	0

2. 調査時期

2002年11月～12月。

3. 調査手続き

1対1の半構造化面接で行われ、所要時間は20～90分程度であった。面接内容は被面接者の承諾を得て、レコーダーに録音された。なお、面接開始前に、被面接者が話したくない内容は話さなくてもよい旨の教示を行った。

4. 調査内容

①基本的属性および個人的特性に関する項目

性別、年齢、好奇心の程度、社会的スキル、自己開示傾向、信仰の有無の6項目。なお、好奇心の程度については「好奇心が旺盛ですか」、自己開示傾向については「自分自身のことを他の人に話すことが多いですか」、社会的スキルについては「友人をつくるのは上手ですか」といった表現で尋ねた。

②改訂版 UCLA 孤独感尺度

Russell, Peplau, & Cutrona (1980)が開発した20項目について、工藤・西川(1983)、諸井(1995)を参考に、面接用に訳出した尺度を使用した。評定は、「あてはまらない(1点)」～「あてはまる(4点)」の4件法であった。

③社会的ネットワークの量および質

友人・知人の数、家族構成・同居家族の数、余暇の過ごし方、趣味、職業の有無、会合への参加度の6項目。なお、余暇の過ごし方については「休みの日はどのようにして過ごすことが多いですか」、会合への参加度については「現在、地域の会合などに参加されていますか」といった表現で尋ねた。

④過去との比較および他者との比較に関する項目

中年期(45歳頃)の生活との比較、同年代の友人との比較、これまでの人生で最も良かったと思う時期の3項目。なお、中年期の生活との比較については「45歳頃の生活と比べて、現在の生活をどのように感じますか」、同年代の友人との比較については「同年代の友人と比べて、〇〇さんの生活はどのようなものだと思いますか」、これまでの人生で最も良かったと思う時期については「これまでの生活の中で、最も良かったと思うのは何歳くらいですか」といった表現で尋ねた。

III. 結果と考察

分析1

1. 基本的属性および個人的特性と孤独感

孤独感得点の平均値は34.49、標準偏差は5.51であり、全体的な孤独感得点は低い傾向にあった。ここでは孤独感のあり方を相対的に位置づけるため、平均値を基準として、孤独感得点がこれより低い者を孤独感L群、高い者を孤独感H群とし、以下の分析を行った。なお、本調査では対象者数が少なかったため、統計的検定は行わなかった。

基本的属性および個人的特性と孤独感の関連を検討するために、まず、基本的属性として性別、居住地域を取り上げ、孤独感との関連をTable2に示した。

Table2 基本的属性と孤独感

		孤独感L群	孤独感H群	計
		N	N	N
		(%)	(%)	(%)
性別	男性	7 (38.9)	11 (61.1)	18 (100.0)
	女性	11 (64.7)	6 (35.3)	17 (100.0)
居住地域	都市部	10 (50.0)	10 (50.0)	20 (100.0)
	農村部	8 (53.3)	7 (46.7)	15 (100.0)

これより、男性の場合は孤独感H群の割合がL群の割合よりも高く、孤独感を感じやすい傾向にあるのに対し、女性の場合には孤独感L群の割合がH群の割合よりも高く、男性ほど孤独感を感じていないことが示唆された。また、都市部と農村部では孤独感H群とL群の割合がほぼ同程度であったことから、居住地域による孤独感得点にはほとんど差がみられないことが明らかとなった。

次に、個人的特性として、好奇心の有無、社会的スキル、自己開示傾向、信仰の有無による孤独感得点の高低をTable3に示した。

これより、好奇心が無いと答えた者は、孤独感H群がL群の割合よりも高く、また、社会的スキルが低いと答えた者は、孤独感H

Table3 個人的要因と孤独感

		孤独感L群	孤独感H群	計
		N	N	N
		(%)	(%)	(%)
好奇心	無し	3 (33.3)	6 (66.7)	9 (100.0)
	有り	12 (54.5)	10 (45.5)	22 (100.0)
社会的スキル	低	3 (33.3)	6 (66.7)	9 (100.0)
	高	10 (55.6)	8 (44.4)	18 (100.0)
自己開示傾向	低	8 (42.1)	11 (57.9)	19 (100.0)
	高	10 (66.7)	5 (33.3)	15 (100.0)
信仰	無し	5 (33.3)	10 (66.7)	15 (100.0)
	先祖	8 (61.5)	5 (38.5)	13 (100.0)
	特定の信仰	5	2	7
	有り	(71.4)	(28.6)	(100.0)

群がL群の割合よりも高かった。一方、好奇心が有ると答えた者、社会的スキルが高いと答えた者については、孤独感L群と孤独感H群の割合がほぼ同程度であった。これは、好奇心や社会的スキルを自分の人生に対するコミットメントの程度だと考えれば、こうした積極的な姿勢があったとしても孤独感が完全に解消されることはなく、こうした積極的な姿勢が無い、もしくは低い場合に特に孤独感を感じるが多くなるのだといえる。すなわち、孤独感を低減させるためには、こうした人生に対するコミットメントが必要条件の1つとなるのではないかと考えられる。また、自己開示傾向に関しては、自己開示傾向が高いと答えた者は、孤独感L群の割合がH群の割合よりも高かったことから、自分自身のことを他者に話す傾向が高い者ほど、孤独感を感じにくいことが示唆された。

信仰の有無については、信仰が無いと答えた者は孤独感H群がL群の割合よりも高いのに対し、先祖を奉っていると答えた者や特定の信仰があると答えた者は孤独感L群がH群の割合よりも高かった。これは、現実の対人関係だけでなく、先祖あるいは特定の信仰が心の拠り所となって老年期の人々を支え、孤独感を低減させている可能性を示唆していると考えられる。

2. 社会的ネットワークと孤独感

社会的ネットワークと孤独感の関連を検討するために、まず、知人の数、親友の数、同居家族の人数と孤独感得点との相関係数をそれぞれ算出したところ、いずれも有意な相関がみられなかった。このことから、量的指標で表される対人関係は、老年期の孤独感に対してあまり関連を持たないことが示唆された。すなわち、独り暮らしかどうか、あるいは、他者から孤立しているかどうか、といったことと孤独感とは関連が低いことが示唆され、「高齢⇒独り暮らし⇒孤立⇒孤独」といった単純な図式は成立しないことが明らかとなった。

次に、余暇の過ごし方・趣味の有無、職業の有無・会合への参加度による孤独感得点の高低を Table4 に示した。なお、余暇の過ごし方に関する分析の際には、「留守番」「洗濯」「読書」「盆栽」「野菜づくり」「テレビ」などを「自宅での活動」とし、「買い物」「運動」「山登り」「カルチャーセンター」「老人会」などを「外での活動」とし

Table4 社会的ネットワークの量と孤独感

		孤独感L群	孤独感H群	計
		N	N	N
		(%)	(%)	(%)
余暇の過ごし方	自宅での活動	6 (37.5)	10 (62.5)	16 (100.0)
	外での活動	12 (63.2)	7 (36.8)	19 (100.0)
趣味	無し	4 (57.1)	3 (42.9)	7 (100.0)
	有り	14 (50.0)	14 (50.0)	28 (100.0)
職業	無し	14 (58.3)	10 (41.7)	14 (100.0)
	有り	4 (36.4)	7 (63.6)	11 (100.0)
会合への参加度	低	4 (50.0)	4 (50.0)	8 (100.0)
	高	14 (51.9)	13 (48.1)	27 (100.0)

て分類した。

この結果より、余暇の過ごし方に関して、自宅で活動すると答えた者は孤独感H群がL群の割合よりも高く、外で活動すると答えた者は孤独感L群がH群の割合よりも高かった。これは、自宅での活動が「洗濯」「読書」「盆栽」「テレビ」といったように、一人で行う活動が中心であるのに対し、外での活動は「買い物」「山登り」「カルチャーセンター」「老人会」と、他者と共に行う活動や社会的活動が中心であることから、他者および社会との接触が孤独感を低減させる可能性を持つことが明らかとなった。このことから、孤独感の低減には、余暇を自宅で過ごすよりも外での活動に費やす方が効果的だと考えられる。

また、職業の有無に関しては、無職者では孤独感L群がH群の割合よりも高く、有職者では孤独感H群がL群の割合よりも高かった。これは、職業が無い者の場合には、自由な時間を自分のために使えることから、カルチャーセンターなどの活動に参加したり、孫の面倒をみることでジェネラティブティを發揮したりすることができ、孤独感を感じにくくなるのではないかと推察できる。この点に関してはさらに詳細な検討が必要である。

また、趣味の有無および会合への参加度による孤独感HL群の割合に差異はみられなかった。

3. 過去との比較および他者との比較と孤独感

過去との比較および他者との比較と孤独感の関連を検討するために、中年期との比較、同年代との比較、最も良かったと思う時期による孤独感得点の高低を Table5 に示した。なお、中年期との比較では、「あの頃の方が良かった」といった内容の回答を「過去肯定」、 「昔は大変だった」「今の方が良い」といった内容の回答を「現在肯定」、 「あの頃はあの頃で良かったし、今は今で良い」「どちらということもない」「変わらない」といった回答は「その他」として分類した。また、同年代との比較では、「他の人の方が良いと思う」といった内容の回答は「他者肯定」、 「他者と比較した結果、自分の生活に満足している」といった内容の回答は「自己肯定」、 「比較できない」「普通」「似たようなものだと思う」「分からない」といった回答は「その他」として分類した。最も良かったと思う時期では、

Table5 社会的比較と孤独感

		孤独感L群	孤独感H群	計
		N	N	N
		(%)	(%)	(%)
中年期との比較	過去肯定	2 (33.3)	4 (66.7)	6 (100.0)
	現在肯定	13 (61.9)	8 (38.1)	21 (100.0)
	その他	3 (37.5)	5 (62.5)	8 (100.0)
同年代との比較	他者肯定	3 (100.0)	0 (0.0)	3 (100.0)
	自己肯定	10 (58.8)	7 (41.2)	17 (100.0)
	その他	5 (33.3)	10 (66.7)	15 (100.0)
最も良かった時期	過去	8 (40.0)	12 (60.0)	20 (100.0)
	現在	10 (71.4)	4 (28.6)	14 (100.0)

現在以外のある時点を挙げた回答を「過去」,「今が一番良い」といった内容の回答を「現在」として分類した。

この結果より, 中年期との比較および最も良かった時期に関して, いずれも現在よりも過去の方が良いと回答した者では, 孤独感H群がL群の割合よりも高く, 現在が最も良いと回答した者では, 孤独感L群がH群よりも高いことが明らかとなった。このことから, 過去のある時点ではなく, 現在の自分の生活を最良のものとして受容できるかどうかが孤独感と関連しているのではないかと考えられる。服部(2000)は, Erikson(1950)による老年期の発達課題「自我の統合」を, 自分自身と自分の生きてきた唯一の人生を受け入れ, 自分の人生は自分自身の責任であるという事実を受容することであると述べている。生理的・心理的な老いの受容は容易いことではないが, それでもなお, 過去より現在の方が良いと思えることが, 孤独感の低減に繋がるのではないかと推察される。

分析2

老年期における過去・現在への意味づけを検討するために, 過去との比較および他者との比較の中から, 中年期との比較, 最も良かったと思う時期の2点を取り上げ, その回答の分析を行った(Table6, 7)。

まず, 中年期との比較において, 「中年期の方が良かった」とした過去肯定の理由については「未来への希望」「現在の孤独」「充実感」の3つに分類された。また, 「今が最も良い」とした現在肯定の理由については「責務からの解放」「生活のゆとり」の2つに分類された。これらを見ると, 過去肯定の背後には, 現在の生活での不満足感や喪失感, 孤独感が存在していることが考えられる。一方, そうした喪失感や孤独感よりも, 仕事や育児といったあらゆる責務からの解放と時間的・経済的ゆとりによる自由さに十分な満足感を得ている場合には, 現在の生活を肯定できていることが示唆された。全体的には現在肯定が過去肯定よりも多く, 仕事あるいは育児に追われ, 拘束や責任の中で多忙な生活を強いられた中年期の苦勞が推察される。

次に, 最も良かったと思う時期において, 現在以外のある時点での過去を挙げた理由については「育児からの解放」「社会的役割の充実」「経済的ゆとり」「自由」「その他」の5つに分類され, 時期

については40~60歳の中年期という回答が最も多かった。また, 「今が一番良い」と現在を挙げた理由については, 「育児からの解放」「社会的役割からの解放」「家族からの追慕」「その他」の4つに分類された。このことから, 育児から解放されることがいかに安堵感をもたらすものか明らかになったとともに, 老年期に自分の過去を振り返ったとき, 人生の中で最も良かったとされる時期は, 身体的な若さに象徴される青年期や成人期ではなく, 家庭では育児を終え, 職業人としては社会的役割の充実あるいは解放の時期となる中年期であることが示唆された。これは, 今日の労働者が退職後の認知も人生に対して楽観的である(Hendrick, Wells & Faltetti, 1982)という先行研究と一致する結果だといえる。したがって, 子どもの巣立ちや退職というイベントを, 喪失ではなく解放として肯定的に捉えられ, 積極的に意味づける老年期の人々が多いと考えられる。

本調査の対象者は, 大正9年~昭和12年生まれのコホートであった。このコホートは, 青年期に第二次世界大戦, 成人期・中年期には日本の高度経済成長, 老年期には阪神大震災を経験した世代である。したがって, 身体的に充実していた青春時代を戦争の混乱の中で過ごし, その後, 女性は育児, 男性は朝早くから夜遅くまでの仕事を強いられた時代を生き抜いたこの世代の人々は, 経済的に豊かな時代の訪れとともに育児や仕事から解放され, 自分自身のための時間を持つことに, 孤独感ではなく満足感を感じられるのかもしれない。今後, こうしたコホートによる影響を考慮した研究を積み重ねていくことが望まれる。

IV. 引用文献

- Hendrick, C., Wells, K.S., & Faltetti, M.V. (1982). Social and emotional effects of geographical relocation on elderly retirees. *Journal of Personality and Social Psychology*, 42, 951-962.
- 服部祥子(2000). 生涯人間発達論—人間への深い理解と愛情を育むために— 医学書院
- 加藤義明(1988). 孤独感の心理学 誠信書房 (Peplau, L.A. & Perlman, D. (1982). *Loneliness: A Sourcebook of Current Theory, Research and Therapy*. New York: John Wiley & Sons.)
- 諸井克英(1995). 孤独感に関する社会心理学的研究 風間書房
- 仁科弥生(1977). 幼児期と社会 I みすず書房 (Erikson, E. H. (1950). *Childhood and Society*. New York: W.W. Norton & Company.)
- 岡本祐子(1995). 高齢期における精神的充足感形成に関する研究(第1報) —高齢者の精神的充足感獲得と生活の満足度および主体的欲求との関連性— 日本家政学会誌, 46, 923-932.
- 長田久雄・工藤 力・長田由紀子(1989). 高齢者の孤独感とその関連要因に関する心理学的研究 老年社会科学, 11, 202-217.

Table6 中年期と現在の比較

過去肯定		現在肯定		その他	
カテゴリ名	内 容	カテゴリ名	内 容	カテゴリ名	内 容
未来への希望 <2>	・当時は「まだこれから！」と思っていた。<1>	責務からの解放 <23>	・今の方が呑気で気楽。のんびりしている。<7>	過去・現在双方への意味づけ <2>	・若くて元気だったので、当時は当時でよかった。今は病気をせず、孫のお守りができるのでよかったなあと思っている。<1>
現在の孤独 <2>	・当時は「息子にどんな嫁が来るのか」といった楽しみがあったが、今はもう現実になってしまった。<1>		・当時は、子育てしなければならなかったので、忙しかった。<5>	不変性 <1>	・当時は仕事に精一杯で、仕事に対しての充実感が溢れていた。その反面、自分の人生に対してという観点では、今の方が充実感がある。<1>
充実感 <1>	・今は何をやるにしても自分だけが頼りなので、寂しいこともある。<1>		・朝早くから夜遅くまで仕事をしていたので大変だった。<5>		・一生変わらない生活。不景気でも、世間がバブルで威勢よく生活しているときも、変わらない。<1>
	・当時は子どもも夫もいたので、張り合いがあった。お金は無くても、家族に囲まれていた頃の方が幸せだと思う。<1>		・今は働かなくていい。責任もない。<2>		
	・当時は転勤も出張も多かったが、喧嘩しながら仲良く仕事していたので、そういう意味では当時の方が充実していた。<1>		・今の生活は極楽みたいなもの。<2>		
		生活のゆとり <3>	・今はすべてお嫁さんに任せているので、楽。<1>		
			・当時は、会社で下から突き上げられ、上から押さえられ、窮屈だった。<1>		
			・今はお金さえ出せば食べたいものが食べられる。<1>		
			・今は、お金もあるし、時間もあるし、体力もある。<1>		
			・若いときは収入がなかったもので、苦労した。<1>		

< >は回答数

Table7 これまでの人生で最も良かったと思う時期

過去肯定		現在肯定	
カテゴリ名	内 容	カテゴリ名	内 容
育児からの解放 <2>	・子どもを片づけて、ホッとした頃が一番良い時期だった。<1> ・子どもが成長して、働きに行くようになった頃、やれやれと思った。<1>	育児からの解放 <5>	・子どもを片づけて、今が一番良いかもしれない。それまではいろいろと心配事があったけれど、今は責任がないので満足している。<1> ・子どもの世話をしながら、ずっと厳しかった。今が一番良いと思う。<1> ・これまで良いときがなかった。孫を育てている間は気を遣っていたので、今が一番良い。<1>
社会的役割の充実 <5>	・47歳～50歳を過ぎた頃。忙しい方が好きなので、子どもが結婚した前後は、仕事と家庭の両方が忙しくて良かった。当時は大きな工場が次々と建ち、仕事面での生きがいも大きかった。<1> ・30代後半から50代にかけて、仕事の上で自分を認められるようになり、ある程度の自由を与えられた。健康にも恵まれていたし、その頃が一番良かったと思う。<1> ・今から15年くらい前。仕事での充実感があつたし、良かったと思う。<1> ・50代前後。好きな仕事をさせてもらい、企業の中でも責任ある立場にいて、会社も順調だった。家庭でも子育てが終わりに近づき、すべてが良かった。<1> ・45歳くらいから定年までは、自分の好きな仕事をしていたので、良かったと思う。<1>	社会的役割からの解放 <3>	・子どもが結婚して、孫にも手がかからなくなったので、今だと思う。<1> ・子どもが結婚して出て行ったので、今が一番まし。<1> ・仕事をしていた頃は、責任が重かったのも、ノルマノルマでひいひい言っていた。今が一番良い。<1> ・元気な頃は、働いて働いて働いた上に働いて…。今は小遣い程度にお金をもらえて、良いと思う。<1> ・今になって初めて良かったと思う。これまでずっと毎日毎日時間刻みで過ぎるような忙しさで、自分が休めば周りの人に迷惑がかかるような状態だった。風邪をひいても休めなかった。今はようやく自分のしたいことができるようになった。<1>
経済的ゆとり <4>	・50代になり、子どもが大きくなり、会社の給料もかなり良くなってきたので。<1> ・仕事を辞める前くらい。経済的に多少余裕があった。<1> ・60歳頃。身体が元気で、働けばお金が入ってきたので、そのくらいの年齢が一番楽しくて良かった。戦後、物が無い時代だったので、若い頃から苦勞のし詰めだった。<1> ・50歳くらいから。思慮分別が出てくるし、子どもが就職したことで、ある程度の自由なお金が出てきた。お金の余裕ができるということは、自分の好きなことができるということだから。<1>	家族からの追慕 <3>	・今が一番。子どもも孫もいて、子どもにしてやれなかったことも孫にしてやれるから。<1> ・孫も娘も慕ってくれるし、今は何も気兼ねすることがない。<1> ・孫がいて、みんな寄ってきてくれるので、今が一番良いと思う。<1>
自由 <2>	・学校を卒業してから兵隊に行くまでの昭和17年～20年頃と、戦後4年程。その頃は気ままなことをしていたので、一番良かった。戦後は、闇市があった時代なので、好き勝手なことをしていた。その頃が青春時代で、一番面白かった。<1> ・20代。したいことができたから。<1>	その他 <4>	・若い頃はいろいろと先の希望があり過ぎたので、今が一番。<1> ・良いときがなかったもので、今が一番良いと思うしかない。<1> ・若い頃は結核を患ったので、今が一番良い。<1> ・いつも今が一番良いと思っている。<1>
その他 <4>	・結婚して、子どもを産んだ頃は、貧乏だったかもしれないけれど、良かったと思う。<1> ・52～53歳までの2～3年間。姑が亡くなってから、夫が亡くなるまでの間だけが一番良かった。<1> ・60歳くらいになった頃、子どもが「旅行に行っておいで」と旅館をとってくれたときだと思う。<1> ・空襲前。戦争でみんなめっちゃめっちゃになった。<1>		

< >は回答数